

と同じトロントの郊外に位置している。何よりも感心したのは、患者の食事だ。

いくつか用意されたメニューの中から好みのものを選べるというのがひとつ。さらには朝食が八時、昼食が十二時というのは日本と同じだが、夕食は六時だ。しかも、必ず温かい食べ物を出している。

日本の病院では調理場従業員の勤務態勢が最優先に考えられているため、冷たい料理を食べさせられることが多く、それが患者の不満のひとつになっているのはご承知の通りだ。しかし、この病院では院長のJ・C・ヘップバーン氏が冗談半分に言うように、「患者さんから食事が熱過ぎるといふ文句がしょつ中出る」

こうしたサービステ態勢が可能になったのは、「調理・冷蔵・再加熱システム」という特別の方式を同病院でとり入れているからだ。これはいったん調理した食事を摂氏四度ぐらいで保存しておき、配膳の三十分前に特殊な方法で再加熱して配るといふ仕組みである。調理は五分分まとめて行うため、週末には調理場の職員がだれもいなくても患者に食事が出せるといふことだ。いわば、従業員のカットで経費削減もできる上に患者サービスマも向上するという「一挙兩得」を実現したもので、ヘップバーン氏もご自慢の様子だった。

患者の快適さを最優先

病院ばかりでなく、慢性病患者のためのナーシング・ホームでもそうした患者への配慮が至るところに見られた。バンク

パー市内にあるロイヤル・アーチ・メーソニック・ホームはその典型的なケースである。

一昨年の四月にオープンしたばかりで、真新しく近代的な建物が周囲を圧するメーソニック・ホームは、百三十人の患者の大半が八十歳以上という老人向けのナーシング・ホームだ。老人ボケの患者も多く、日本でいえばいわゆる「老人病院」といった施設だが、そんな暗いイメージは微塵もない。

代表者のG・S・ランザ氏によると、「できるだけ患者のプライバシーを尊重するように努力しており、服装も自由で、食事のメニューも選べるよう工夫している」とのことだ。患者の評判も上々で、常に二百人以上の人がベッドの空きを待っている状態だといふ。

ランザ氏の案内でホームの中を見て歩いた。広い機能回復訓練室、採光が十分に配慮されている病室。サンルームや食堂、読書室も整備されている。娯楽室ではトランプに興じる患者の姿もあった。ある女性患者の個室も見せてもらったが、壁には手づくりの人形などが所狭しと並べられて、アパートの自室で生活を楽しんでいるといった風情である。

このようにカナダで訪ねた病院、ナーシング・ホームではどこでも、患者の快適な生活を最優先に考えているのが印象的だった。もちろんすべての医療機関を見ただけではないので、これがカナダの標準的な医療だと即断する勇氣はない。しかし、ともすると病気の治療にだけ目が

行きがちな日本の医療界に比べて、病人の精神状態のケアも含めた総合的な対応をしているカナダの医療のあり方に、一日の長を見る思いがしたものだ。

患者奉仕の医師養成

ただこれからの問題は、冒頭にも触れた国の財政悪化を背景とした、患者自己負担の増加である。医療の内容は優れていても、自己負担が重くなれば結果的にはお金を持っている人しかそれを享受できなくなる。例えばメーソニック・ホームの患者負担一か月約七万円は、年金でカ



ヨークセントラル病院の食事再加熱装置。(筆者撮影)

バーでできる範囲の金額だが、仮に将来その負担が増えれば、払えなくなる人が出てくることも当然予想される。公平な医療という従来のカナダの政策が実に優れたものだけに、これからは苦しい選択を強いられることになるだろう。最後にユニークな医師養成で知られる

マクマスター大学医学部を簡単に紹介しよう。オンタリオ州ハミルトンにあるこの大学では、講義スタイルの授業もなく、試験も行なわないという特色のある医師づくりをしている。医学部教授のノーマン・F・ホワイト氏によると、その狙いは「医学知識の詰め込み教育ではなく、患者に実際に対した時に自分で問題点を発見し、それを解決できるような態度を学ばせること」だといふ。

学生は十人単位の「チュートリアルグループ」という組織に分けられ、学生一人に指導教官一人がついてキメ細かな教育を行なっている。しかも自分の研究テーマや学習の方法まで、学生自身が判断して決めることが義務づけられる。教官はそれが正しい方向に進んでいるかチェックし、補助するだけだ。

また面白いのは入試の方法で、いわゆる学力テストは行なわず、一次の論文試験で四百人に絞った後、医学部教員や地域の開業医、さらには地域住民の代表などで構成する面接チームによってインタビュー試験を実施して、合格者を決めるといふ。ホワイト氏は、これらのユニークなシステムをとっているのは「患者に奉仕する医師をつくるためだ」と強調した。

ここでも「患者のため」という言葉が無理なく使われている点に注目しなければならぬ。カナダの医療界を貫くトーンは、結局この思想である。ともすると、医師優位の考えが色濃く残る日本の医療界への警鐘になると思う。